

ことばの意味とところ

語源に学ぶ

父 という漢字

父という字は、漢字の最も古い解説書である説文(著者許慎は一世紀に活躍した人)により、古い形は𠂔であり、それは「又(手の形)とノ(杖の形)との合字」である

と説明されています。つまり、「手に杖を持つ」形であり、それは「一家を率い、教え導く家長を意味する文字である」と解説されています。

その構造は、「政」や「教」の「父」の部分と同じものであって、「国民を『正義』に導く」のが「政」であり、「子供を教え導く」のが「教」ですが、その「教え導く」意味は「父」にあるのです。こう



してみますと、「当時の『父』は、一家を統率し、家族を教導する権威と責任を持っていた」ことになります。従って、論語の「父父たり」という言葉は、「父たる者が、一家を統率し、家庭を教導する権威と責任を全うすることの意味しているのだと思います。」ところで、今の『父』はどうでしょうか。数年前、ある雑誌に紹介されていた中学生の狂歌。

「家庭とは父厳しくて母優し、それでいいのだ。うちは違うが（中二男）」

「人並みに叱られてみたい時もある、俺の親爺は俺が怖いのか（中二男）」

「心からすがりつこうとする時に、いつも父さん逃げてしまうよ（中一女）」

などにみられるように、一家の主人として、家族を教え導く権威を全く失ってしまっている父親が多いように思われます。これでは、一家が幸福になれるはずがありません。「地獄だな、心通じぬ人たちがいやでも同じ家に住むとは（中二男）」などと言っているうちはまだよいのです。このような無力の父親だと、そのうちに一家はほんとの地獄に陥りかねません。

ねません。

どんな子供でも、心の奥底では、甘い父親よりも、厳しい、指導力のある父親を望んでいるものです。『父』という字にふさわしい父親であるように、父たる者、努力してほしいと思います。

『母』という漢字

母という字の成り立ちについて説文では、古い字形は𠂔となっていて、「母は、女という字を基礎に作られた字であって、婦人が乳児を抱いている形を象ったものである」と説明されています。しかし、今は一般に「女」に加えられた「ㇿ」は『乳房』を表わしたものである」と考えられています。

説文に掲げられている字形は「篆文」と言われるものですが、それよりも古い字形である「金文」や「甲骨文」を見ますと、「𠂔」は明らかに乳房を表わしていると思われる。『増韻』という字典によりますと、「母は慕^ほという言葉から来ている。『嬰兒の慕^ほ所の人』という意味の言葉である」と解説されていますが、乳児の慕^ほ所は「母親の乳房」ですから、母という字の「𠂔」が乳房を表わしているという説明は、よく納得できます。



説文では「母は牧という言葉から来ている」と解説されていますが、牧は牧畜の牧で「子を生ませ養い育てる」という意味の字です。昔、中国では、州の長官を「牧」と言いましたが、それは人

民を養育するのがその任務だったからでしょう。キリスト教の「牧師」という言葉は、「精神の面で人々を養い育てる師表たるべき人」という意味で作られた言葉だと思います。母と牧では音が全く違う、と思われるかも知れませんが、牧をボクと書き表わしても、ほんとうの音はボツと言って、耳で聞く限り、同じ音と言えるのです。

さて、母という字は、一つは「乳児の慕^ほう人」であると言い、一つは「子を生み育てる人」であると言っていますが、いずれにせよ母たる者の本質をよく表現した文字だと思えます。しかし、今の母親には「自分の乳房で子供を養い育てている」母親が少ないようです。それで果たして母親と言えるのか、これは大いに考え、反省すべき問題だと私は思うのです。

“教師”という漢字

教の古い形は教ですが、それは教の略字だと考えられています。學(学)の本字も教だ
という説があつて、**教**と**學**とは元は
同じ言葉だったと考えられます。



中国の最も古い書物にも、「教学相長ず(教
えることと学ぶことの両方で人間が磨かれ
る意)」「や「教ふるは学ぶことの半ばなり」
という言葉があつて、少なくとも教と学とは
表裏一体をなすものであることは確かです。
さて教は、學の意味の孝と、軽くたたいて

警告する意味の文との合字です。夕は線を交差させた形で、音は交、なまってキョウ
です。自分より優れた人と交わつて、その美点をまねる(古語はまねぶで、まなぶの古語
でもある)ことを意味しています。「效はまねる」まなぶの意味の字

つまり、教とは「自ら学ぼうとする者に対して上から指導助言を与える」ことで、やる
気のない者に道理を説き聞かせたり、知識を詰め込むことはありません。

師は目と市との合字です。目は堆(タイ・スイ)の本字で小高い丘を象った字。市は止
(之の古い形)を逆さにした形の字で、行つて返る、つまりめぐる意味の字です。

だから、師は「丘をとりまくほどの大軍」という意味で、軍団の単位のうち最大のものの
称になりました。周代の軍制では、五人を伍、五伍を兩、四兩を卒、五卒を旅、五旅を師
と言いました。つまり師は二千五百人の軍団です。(旧日本軍でも師団、旅団の称が用い
られました)。さて、軍隊を率いる者を**帥**と言いますが、帥は率と同音同語です。今

の「教師」の師の用法は、この「師」shīの借用で「人々を教え導くもの」の称となつたものです。周の制度で最高位の三公のひとつに「大師」がありますが、これは「衆人を教え導く」天下第一等の高德者のために用意された官位です。教師とはそういう大変な榮譽ある名称なのです。

「子供」という漢字

子という漢字は、両手を広げた赤ちゃんの形を象つた字（ㇿ）です。手が二つあるのに足が一つになっているのは、おむつに包まれた、まだ歩けない赤ちゃんであることを表わしたものです。

だから、子供の本義は、「赤子」「小児」ということになります。しかし、中国では、

古くから「成人男子の美称」として用いられました。孔子・孟子・老子などの「子」がそうです。これは、子路・子貢・子夏というように逆さにも使われました。

また、「師の称」にも用いられていて、論語で「子曰く」という時の「子」は孔子を指していますが、「先生」というくらいの意味です。

わが国では、古くは小野妹子の例のように男子の美称として用いられましたが、定子・彰子のように高貴な女性の名に用いられるようになり、明治以降は一般の女性の名に専ら用いられるようになりました。

供は、説文には、イと共の形声字だとありま



す。共は、廿(二十)と卅(ハ・両手で捧げる形)の会意字で、多くの人がそろって両手を挙げ、大切な物とともに捧げることが表わした字です。(そのときの心が恭です)だから、「ともにする」が本義です。

供は、「ともにする人」ということになりますから、「おとも(従者)」という意味にも用いられ、わが国では「ども」とも読まれたところから、複数を表わす接尾語の「ども」として用いられるようになりました。複数の接尾語には、「ども」と「たち」とあります。前者は謙讓、後者は尊敬の意味を持ちます。

昔は、「うちの子ども……」「よそのお子たち……」というように使い分けたものです。今は「子供」という表記から、「こども」は一つの言葉のように考えられ、「子供たち」という言い方が少しも怪しまれないようになりました。

遊 という漢字

遊という字は、「あそぶ」と読まれている字ですが、その意味は「決まった場所にとどまらず、あちらこちらを歩き回る」という意味の字です。

遊の発音は、悠ゆうです。だから、悠という字の「のんびりとしてとらわれない」という意味が、この「遊」という字にも含まれています。つまり、「遊とは悠の心に基づく行為であり、悠の心が行動となって外に現れたものが「遊である」ということです。「遊牧」という言葉は、牧人が、一か所に定住しないで、水や草のある土地を追って移り住みながら牧畜に従事すること」を表わした言葉ですが、この「遊」は、その意味をよく表していると思います。

遊という字は説文には見えません。游と游とあって、どちらも、𠂔と汙の形声字だ

と説かれています。だから、「旂」が本字であって、それが游と変わり、また遊となったものだと思います。

が、わで、旗竿に着けられた吹き流しが風に翻っている形を、実によく表わしていますね。旂リョウという字は、その「吹き流し」を表わした字です。旗は、其ミ（箕の本字）



のように長方形をした旗のこと（ついでに言う、碁や将棋は、長方形の盤を使うのでこの称がある）です。旂ぼうは、毛の飾りのある旗です。その他、旌せいや幡ばんという旗もあります。汙うは「水面を浮上して進む」こと、つまり「泳ぐ」ことです。だから、旂きは（游・遊）は「旗が泳ぐ」ことであり、説文にも「旗が風に吹

き流されること」と説明されています。その説明に続いて、「古い字は遊ユウである」と書かれていて、これが遊ユウの本字かと思われます。（また、迂ユウという字もあります。）ミの古い形は走で、𠂔（道）の略形ミ↓イと、足の略形足との合字です。「道を歩く」意味の部首ですから。遊は「子供が道で吹き流しの旗のように踊る」という意味になります。

言葉コトバという漢字

言葉コトバという言葉は、漢語ではなくて、わが国で作られた言葉です。わが国では昔言葉のことを単に「こと」と言いましたが、それは出来事の意味の「こと」をも表わす言葉でした。それは、昔の人たちは、口に出した言ことはそのまま現実の事こととなると信じていたし、また、事は必ず言ことでしか表現できなかったからでした。

ところが、漢字を使ってこれを表現するようになりますと、必然的に言と事という分離が生じ、奈良時代には、耳で聞いていると同じ「こと」が目では区別できるようになりました。平安時代になりますと、言を「木の葉」に見立てて「言の葉」という言い方が生じ、耳で



聞いても「事」と区別がつくようになりました。た。「言葉」は、その言と葉とを直接つなげたものです。さて、言という字は、説文によりますと、口と辛との形声字だとあります。しかし、辛は二（上の古い字）と干との会意字で、「上を干すこと」ですから、言は、口を干して出てくる「言葉」を表わした会意字と見た方がよいと思います。ついでに言いますと、昔は、言の口

の中に、・を加えて、口の中から出てくる「音声」を表わした字です。葉という字は、説文によりますと、艸（草の古い字で、これが++となり、今の++になった）と葉との形声字で、「草木の葉のこと」だとあります。

葉は、木と世との形声字で、「薄い」という意味の字だとありますが、私は、「木の葉」が本義で、木の葉の薄いことから「薄い」という意味が生じたのだと思います。

世は十を三つ重ねた字で、説文には「三十年を一世となす」とあります。人間は、三十年代で「代がわり」をするので、世を世代という意味に使うわけです。さて、木の葉は、毎年代がわりをしています。それで世と木とで「木の葉」を表わしたのだ、と私は思うのです。

「戦争」という漢字

戦(戰)という字は、例の説文によりますと「戈(人を刺し殺すための武器)と單(の形声字)であり、「戦士が武器を振るって敵と打ち合う」意味の字だと説かれています。單(單)は音がセン(ゼン)もしくはタン(ダン)で、𠂔と𠂔の合字です。𠂔は、ロが二つ並んでいる形で、「意見をたたかわせる」「相手の不正をとがめる」意味の字で、音はケンもしくはカンです。このケンがセン(喧↓宣)に、カンがタン(漢↓嘆)に変化しました。単に「相手の不正をとがめる」意味があるとすれば、戦という字は「相手の不正をとがめ、それに相手が従わないので、最後の手段として武力に訴える」という意味の字であると考えられ、会意形声字ということになります。戦は「相手と力を競う」ものだから、一般に「力や技を競う」ことの意味に用いられ、「巨人・阪神戦」というように、

力や技を競うための「試合」の意味にも使われるようになりました。争(爭)という字は、説文には、「一と受の会意字」だと説かれています。一は何かのものを表わした字で、𠂔と又(𠂔)とはどちらも「手」を表わした字ですから、争という字は「二人の人が、一つの物を、お互いに自分の物にしようと、引っ張りあふ」という意味の字だ、ということになっています。



になっています。

しかし、𠂔は、𠂔(書、律)や𠂔(掃)と同じ構造で、「手に物を握り持つ」形の字と見ることが出来ます。そうすると争は𠂔に𠂔(爪)つまり手が加えられていますから、争は「人が手にしている物を、他の者が奪おうとしてこれに手を掛けた形」と見ることが出来、会意形成

字と考えられます。

いずれにせよ、「自分の物にしようとして人と張りあう」意味に変わりはありません。今では、「論争」「競争」など、広く「張りあう意味に用いられています」。

“健康”という漢字

健という漢字は、例の説文によりますと、人^{ひと}と建^{けん}との形声字で、「強い——しっかりとしている」という意味の字だとあります。

しかし、建という字は、律と廷との会意字で、「朝廷の律令を制定する（立てる）」という意味から「きまりをしっかりと打ち立てる」という意味です。従って、健は「人がきまりの良い生活を打ち立てる」という意味で、「体が強い」ことを表わしたと見ることが出

来ますので、会意兼形声字とした方がよいと思います。

健は「体が強い」ことが本義だと考えてよいと思いますが、今は広く「勢いが良い」という意味に使われます。「健筆」は、筆の勢いが良いという意味で、「文章を書くのが上手」

という意味に使われます。「健忘」は、忘れ方

が激しいことで、「よく物忘れをする」意味に

使われます。康という字は、古い字形は康^{きやう}で、

説文には、米^{こめ}と庚^{かう}との形声字だとあります。庚

は手に杵^{きね}（きね）を持つことを表わした字で、

「穀物を搗く」ことを表わしたものです。

従って、康という字は、「もみ米を搗いて、

もみがらやぬかを取り除く仕事」を表わした字



です。

つまり、今の「糠（もみぬか）」の本字で、初めは「ぬか」の意味に使われていたが、後に「康は（やすし）」の代用として使われるようになり、康は「やすし」だけに使われるようになってしまいました。

それで、「ぬか」を表わすために「糠」という字を作ったわけです。

康という字は、説文には、家と康との形声字だとありますが、家に女がいるので「やすらか」であるという「安」が会意字であるように、「家に康（食べ物）」が十分にあるので「やすらかである」と考えることが出来ますので、会意兼形声字とした方がよいと思います。